
嘘つきな僕は【ボク】を殺す。

如月 霧諒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきな僕は【ボク】を殺す。

【Nコード】

N7238X

【作者名】

如月 霧諒

【あらすじ】

いつからか性別で悩み始めた少女の恋愛小説です。

偏見がある方は、戻るで

中傷は受け付けません

初めて書く小説なので誤字などがあると思いますが読んで頂けたら

嬉しいです。

昔から、自分の性別というモノがあやふやだった。
一応、戸籍上ボクの性別は【女】であるが心は【男】で未だに性別
というものに悩まされている。

幼い頃、ボクは普通に【男の子】が好きだった。

そう…ボクは普通だったんだ。

あの日までは…

小学校に上がったボクは大好きだった『翔琉』^{かける}とは別の小学校へ入
学した。

翔琉と小学校が別になり遊ぶこともなくなってしまったが新しい友
達も沢山で来て楽しく過ごしていた。

小学校二年生になったある日隣のクラスに転入してきた男の子。

加賀山 翔琉^{かがやまかける}。

そう、ボクの大好きな翔琉が転入してきたのだ…
小学生ながらボクは、喜んだまたあの頃みたいに遊べると思っ
ていた。だけど、翔琉はいつも他の男の子とサッカーしたりして
声もかけられなかった。

ある日、翔琉の方からボクに声をかけて来た。

「今日、久しぶりに遊ぼうよ」

久しぶりに翔琉の声をまともに聞いた。

翔琉は、もうボクの事忘れたのかと思うぐらい久しぶりな気がした。嬉しかったけどボクはもう他の友達と約束してしまっていたから「明日でもいい？」と聞いたら翔琉は、あの頃と変わらず笑顔で「わかった、じゃあバイバイ」そう言って走っていった。

- 次の日 -

約束が果たされることはなかった。

あの日の事は今でも忘れない集会でもないのでに体育館に集まった全校生徒。

泣いている同級生と先生たち。

「悲しいお知らせがあります」

嫌な予感がしていた。

朝から泣いていた同級生、隣の教室はざわめいていて机の上には花瓶…

「知っている生徒もいると思いますが昨日の夕方…」

- 聞きたくない -

「二年生の、加賀山翔琉くんが」

- やめて -

「交通事故で亡くなりました」

ズキン
…

心が苦しくなった。

その後、校長先生の話なんて何にも耳に入ってこなかった。

「では、一年生から教室に戻ってください」

- 嫌だ -

- 今日、遊ぶ約束したのに -

「カナちゃん？」

友達の呼び掛けさえボクには届かずボクの視界がボヤけていて涙が止まらずボクは泣き続けた。

そこから、ボクの記憶はプツリと途切れ気がついたらボクは五年生になっていた。

僕は、小学校五年生になった。

あれから、数年で僕は変わった…長かった髪もショートになり服も男物になり女子とはあまり遊ばずにサッカーやバスケット、カードゲームにテレビゲームすべて男子がやるような遊びにしか興味がなくてまるで、自分が最初っから男の子だったみたいな感覚で恋愛対象もいつの間にか【女子】に変わっていた。

けど、周りは僕を男の子扱いはするけど何か違かった。

ある日、仲のよかった優輝ゆうきと泰介たいすけと数人の男子と王様ゲームをした。

“王様だーれだ！！”

「オレオレ」王様は、泰介に決定した。

「んじゃあゝ、3番が好きな奴に告白！！」

はっ?!

3番とか僕じゃん…

「さあさあ、3番は誰だ？」めっちゃ楽しそうな笑顔で僕達を見渡す泰介の笑顔が憎たらしく思えた。

「俺は4番」そう優輝が言うのと次々に自分の番号を言う男子達…

「つつことは、奏かなが3番か」ニヤニヤと僕を見る泰介に後退りするがよくよく考えてみれば僕に好きな人はいない、それを告げると泰介は「気になる奴くらいいるだろ」と即答されてしまった。

まあ、確かに気になる奴はいるけどその子は【女子】だから思いを告げる事などすれば僕の生活はイジメられる日々が変わる。

この楽しい日々が終わる…そんなの嫌だ。

そんな困っている僕を見て優輝が耳打ちした「ただの遊びなんだからさ適当でいいんじゃない？」

その言葉を聞いて開き直った僕は、「分かった」と渋々okして王様の命令を遂行した。

女が好きだとバレたらきつと腐れ縁のコイツらでも僕の傍から離れていく、そう考えたらもとの性別にもとづくしかなくて僕は【ボク】に嘘をついた。

青柳拓陽あおやぎたくや同じクラスの男子に僕は告白した。

青柳が告白を断るといふ確信が僕の中にはあり僕の人生初の告白は僕にとって【嘘の告白】となった。

そんな馬鹿な事をしている僕への罰なのか告白したその日から青柳は僕の【彼氏】になってしまった。

青柳は、たまに遊ぶくらいで別に好きな訳じゃなかったし中学は地域別だし離れるから卒業までの我慢だと思っていた。

「なあなあ奏お前聞いたか？」

「何を？」

泰介と鉄棒の練習をしていると優輝が来て言った。

「拓陽の奴、俺らと同じ中学なんだって」

「マジかよー！」

「さっき、拓陽と中学どこ行くか気になって聞いたら」

「良かったじゃん奏」ポンツと泰介が肩に手を乗せてきた。

そして、やってきた卒業式の日。

みんなと過ごした6年間…

それは、長いようで短かった。

翔琉を失ったあの日からボクは僕じゃなくなった。

「じゃあ、僕って誰なんだろうね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7238x/>

嘘つきな僕は【ボク】を殺す。

2011年10月19日04時19分発行